KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART

神田日勝記念館だより

神田日勝記念館 〒081-0292 北海道河東郡鹿追町東町3丁目2 TEL(01566)6-1555

画室A 1966年

contents

2 『いのちの詩絵』展
『人を描く展Ⅱ』
『石川文洋報道写真展「戦争と民衆」』
3 第九回 蕪墾祭
第十一回 馬耕忌
開館十周年記念式
4 神田日勝記念館開館十周年記念事業
『ぼくはここにいる～日常と非日常のはざまで』展
『新世紀の顔・貌・KAO』展
関連ワークショップ
『室内風景』の世界ってどんな感じ!?
5 第九回 馬の絵作品展
実技講座「馬の絵の実践的指導」
馬の絵写生会
6 ファミリー美術館事業
親子写生会
親子ワークショップ
アート・キッズ・クラブ
夏休み子どもワークショップ
7 寄稿文『神田兄弟と』 高野 薫
8 「二度生きる―神田日勝の世界」の発刊
神田日勝の初期作品群を北海道遺産に
感想ノートより⑯
「飯場の風景」の感想文を募集

2003.10.20
19

戦没画学生『いのちの詩絵展』

四月二十九日～五月七日 鹿追町民ホール

長野県上田市にある戦没画学生の遺作を所蔵する戦没画学生慰霊美術館「無言館」の協力を得て同館が所蔵する油彩画や素描に詩を加えた約八十点の作品を展示する「いのちの詩絵展」が話題を呼びました。

「無言館」は開館五周年を迎え、全国的に注目を集めている美術館ですが、かつて無言館開館に向けて巡回された「戦没画学生祈りの絵展」が北海道で最初に鹿追町民ホールで開催した機縁があり、今回再度の開催となりました。窪島誠一郎館主が来館して会場の監修にあたり、入念に作品を展示に臨みました。

絵画を志しながらゆめ半ばで応召され、戦地での戦病死のため再び絵筆を取ることができなかった画学生のみずみずしい感性が心を打ちます。懐かしいふるさとの情景、温かな家族の姿、残された時間に懸命に描かれた恋人の姿、戦争という大きな力の中で遺された画学生のメッセージが、添えられた詩文と、窪島館主の哀感漂う解説とあいまって、多くの来館者に深い感慨を与え続けていました。

富山の風土が育む美の創造『人を描く展Ⅱ』

六月十七日～二十九日 鹿追町民ホール

富山県在住の画家安達博文・藤井武、富山県出身の木下晋・水上泰財四氏の大作を一堂に会した展覧会が「人を描く展Ⅱ」と銘打って開催されました。画家に共通するテーマはいずれも「人」。発色豊かなテンペラ技法で人物の顔を大胆にデフォルメした安達氏、漆黒の画面に浮き上がる二つの顔を通し人間の深層を描く藤井氏、鉛筆による細密描写で盲目の瞽女(ごぜ)小林ハルを描き続ける木下氏、そして現代社会に独自の風刺的視線を向ける水上氏、本展覧会のテーマを設定した美術評論家中野中氏は、妥協のない個性の競演こそ、富山美術の県民性であると指摘しました。

展覧会の契機は昨年東京で開催された木下晋画文集の出版記念会での出会い。地元富山でも実現していない顔ぶれの展覧会ということもあり、富山でも話題になったようです。

富山出身の北海道知事の誕生や、北陸銀行と北海道銀行の合併といった話題性も加味されたこの展覧会には、オープニングに高橋はるみ北海道知事のメッセージも披露され、また蕪墾祭と同時開催ということもあり、温かな雰囲気に包まれて、画家とファンの交流も盛り上がりを見せていました。

石川文洋報道写真展『戦争と民衆』

八月九日～十七日 鹿追町民ホール

写真家として「ベトナム戦争」の報道写真等で知られる石川文洋氏の写真展が開催され、話題を呼びました。石川氏は一九三八年那覇市に生まれ、ベトナム戦争にフリーカメラマンとして従軍。日本写真協会賞・日本ジャーナリスト会議特別賞を受賞しています。今回の写真展は、沖縄で開催された展覧会の移動展で、ベトナムだけでなく、ラオス・カンボジア・サラエボ・ソマリア、さらに最近のアフガニスタンを撮影した作品など百二十二点の写真が展示されました。

戦地での兵士の表情や、思わず眼を背けたくなるような戦場での光景の他、枯葉剤で奇形に生まれた赤ん坊、地雷のために片足を失った少年、難民キャンプの表情など、戦場と化した国々に生きる民衆の悲惨さを余すところなく伝えていました。

石川氏は、かねてから計画していた北海道から沖縄までの徒歩旅行に出発し、今回の会場には顔を見せませんでしたが、会期中北海道の日本海岸から東北に達したというメッセージが寄せられました。会場では作品鑑賞後、氏の写真集を求める人が目につきました。

第九回　蕪墾祭（開館記念祭）

六月十七日 神田日勝記念館・鹿追町民ホール

今年は開館十周年の節目の年でもあり、町民約百五十人が参加しました。地元の合唱団「そよ風コーラス」と「コーロ・クテクウシ」による童謡や合唱組曲「水のいのち」などが演奏され、来場者から拍手を浴びました。

町民ホールに会場を移した交流会は、「人を描く展Ⅱ」のオープニングパーティーを兼ねて行われました。主催者等の挨拶に続き、合唱団によるアンコール演奏がありました。また、武田耕治友の会事務局長より、神田日勝の初期作品群を北海道遺産に応募する運動を起こすことが発表されました。

来場者は、恒例の友の会会員による手料理を味わいながらワインとチーズを楽しみ、十周年を祝いました。

第十一回　馬耕忌

八月二十四日 鹿追町民ホール

今年は五十人の参加を得、「地域に根ざすミュージアム―北と南の邂逅」をテーマに、沖縄県の私設美術館「佐喜眞美術館」館長佐喜眞道夫氏、浦幌町立博物館の前館長後藤秀彦氏を迎え、当館学芸係長の菅訓章の司会により鼎談が行われました。また、田中光俊氏によるギター演奏も花を添えていました。

佐喜眞氏と後藤氏は大学の同級で、ともに歴史を学んだ旧知の間柄です。佐喜眞氏は卒業後、鍼灸師の資格をとり、沖縄戦の図を描いた丸木俊氏の針治療をした縁で、沖縄に美術館を建てました。一方の後藤氏は、浦幌町教育委員会に勤務し、十勝管内の他町村に先駆けて遺跡の発掘調査を行い、浦幌町博物館の館報を長年発行して評価を受けました。佐喜眞氏は、西欧の個人美術館や信濃デッサン館等を視察して、センスがよく風土に合うものがよいと確信しました。また、入館者が徐々に増えているのは、修学旅行生が平和学習のために団体で来館したり、沖縄戦の図のモデルになった人が自らの戦争体験を語り、それを来館者に伝えられることも一因だと思われます。後藤氏は、展示作品に対する思い入れと、学芸員がどれだけこだわりを持って取り組むかが重要だと語り、佐喜眞氏は、日勝の絵は人間の尊厳を思い起こさせ、生活の真実を描いた絵であり、若い人たちに勇気を与えている、と印象を語ってくれました。

開館十周年記念式

八月二十四日 鹿追町民ホール

約八十人の列席者の前で、吉田弘志町長が「次代を担う若い世代に神田日勝の作品を貴重な文化遺産として伝えていくことに大きな欣びを感じる」、小檜山博館長が「日勝の絵は人がいかに生きるべきかを問いかける。消えゆく北海道の開拓の風景を描いた日勝の作品を全国に紹介したい」とあいさつしました。また、高橋揆一郎前館長、三井福源前運営協議会委員長、神田日勝記念館友の会に感謝状が贈呈され、上嶋誠一町議会議長、小野寺浩帯広美術館館長が祝辞を述べました。

交流会はホワイトホールに会場を移し、森内清樹開館十周年記念事業実行委員会委員長のあいさつの後、アトラクションとして鹿追中学校吹奏楽部による演奏が行われ、森住陽子運営協議会委員長のあいさつで締めくくられました。

神田日勝記念館 開館十周年記念事業

「ぼくはここにいる～日常と非日常のはざまで」

八月二十三日～十一月三日 神田日勝記念館

「室内風景」1970年

今回の特別企画展は、神田日勝の芸術の意味を、目に見えるものを客観的にではなく、主観的に自分自身がそこにいることを意識して描いたのではないか、ということで「ぼくはここにいる」というタイトルを採用しました。

日勝が描いた自画像には、自分の生き方を意識した確かな存在感があり、『人』（一九六二年）と『一人』（一九六四年）には、周囲の壁や床と同じような静的で寡黙な雰囲気があり、人間の尊厳を感じさせます。

画室のシリーズは全部で五点あり、『画室E』（一九六七年）に初めて積まれた新聞紙が登場し、六八年の『室内風景』ではテレビと絵の具缶の下敷きとして、また『壁と顔』では板壁の貼り紙として新聞紙が描かれています。

「人」1962年

パズルのように描かれた新聞紙の断片は、夫人のミサ子氏によると、日勝本人は実際に新聞を画鋲でベニヤ板に留めて描いていたといいます。中心に座る男のまわりには、見出し文字や広告が読めるようにはっきりと描かれている部分とそうではない部分があります。実際の新聞から引用したと思われる箇所は次のようなものがありました。

「壁と顔」1968年

「室内風景」の部分 1970年

例えば、トクホンチールの広告が実際には石原裕次郎から女性の顔に替えられています。また、〈キャベジンコーワ〉〈薬用マヤロン〉〈北の誉Red Cap〉は、そのままの商標名で登場し、車の〈カローラ〉、テレビの〈三菱電機〉は、広告のイラストやキャッチフレーズが似ていますが、少し変えられて描かれています。

また、〈米不介入を強調〉は当時のベトナム戦争やカンボジア政変などの時代状況を色濃く反映しています。

これらの広告や見出し記事の断片を拾っていくと、事実をそのまま写し取ったのではない、作者日勝の意図が見え隠れし、関心を持っていたもの、メッセージを込めたものがうかがえるように思われます。

氾濫する情報の中にうずくまる一人の男と、描かれた新聞記事の文字から、日勝が生きた時代と、彼が作品に込めた意味を読み解く作業が課題です。

「新世紀の顔・貌・KAO」展

四月二十九日～五月七日 神田日勝記念館二階展示室

美術評論家中野中企画による自画像展。二十七人の作家による立体作品を含めた個性豊かな自画像が展示され、来館者の注目を集めました。記念館の二階展示室を全て日勝作品以外で構成した初の試みということもあり、注目を集めました。

「自画像」森脇 正人

関連ワークショップ

『『室内風景』の世界ってどんな感じ!?』

八月二十三日 鹿追町民ホール・神田日勝記念館

日勝の最後の完成作『室内風景』の空間を体感することをねらいとしたワークショップが、旭川在住の彫刻家・山谷圭司氏を講師に迎え、行われました。参加者は、小学生や高校生など十三名。

家庭やスーパーなどから集めた段ボールに新聞紙を貼る作業を町民ホールで行い、記念館の二階フロアに持ち込んで、ブロック式に積み上げ、ドーム状の空間を作り上げました。完成すると、皆で新聞紙に覆われた内部に入り、日勝の『室内風景』の世界を確かめました。この作品は、八月三十一日まで展示されました。

第九回　馬の絵作品展

十月十一日～十九日　鹿追町民ホール

●募集期間…七月一日(火)～九月八日(月)
●展覧会…十月十一日(土)～十九日(日)
●表彰式…十月十八日(土)　会場　鹿追町民ホール

文部科学大臣賞

神田日勝が馬を描き続けたことに因み、全国の小・中学生を対象に馬の絵作品展を開催します。

審査の結果、文部科学大臣賞に釧路町立富原中学校二年の上野樹さんの作品が選ばれました。

また入賞が十三点、入選が三十二点、佳作が五十二点選出されました。応募総数は鹿追町を含む十勝管内の一四七点を始め、道内一二〇四点、青森県や鹿児島県など道外四〇一点、合計一七五二点と昨年を五十六点上回り過去最高になりました。また、優秀な作品を多数出品した初山別村立初山別中学校に審査委員特別賞が贈呈されます。

北海道知事賞

北海道教育委員会教育長賞

第九回　馬の絵作品展　審査結果（応募総数一七五二点）

●文部科学大臣賞
釧路町立富原中学校2年　上野　樹
●北海道知事賞
小樽市立潮見台小学校4年　梅田絵莉菜
●北海道教育委員会教育長賞
羽幌町立羽幌中学校1年　土屋　早紀
●鹿追町長賞
熊石町立関内小学校4年　西田　真
●鹿追町教育委員会教育長賞
鹿追町立瓜幕中学校1年　法山　大雅
●神田日勝記念館長賞
羽幌町立羽幌中学校3年　三住奈津美
●北海道新聞社賞
芽室町立芽室小学校5年　荻原　初夏
●日本放送協会帯広放送局長賞
羽幌町立羽幌中学校2年　川森　琴未
●十勝造形サークル委員長賞
札幌市立藤野南小学校1年　鎌田　大樹
●帯広市教育研究会図工美術部会長賞
旭川市立日章小学校3年　佐藤　智香
●JR北海道社長賞
帯広市立北栄小学校6年　小谷地桃子
●北海道電力帯広支店長賞
芽室町立芽室小学校2年　若狭　大貴
●帯広信用金庫理事長賞
鹿追町立鹿追小学校3年　下坂　和彦
●審査委員特別賞
初山別村立初山別中学校

関連事業

実技講座「馬の絵の実践的指導」

六月二十三日　鹿追町民ホール

町内の小中学校教諭を対象に、講師に画家でもある元清水幼稚園長の村上俊彦氏を迎え、実技講座が行われました。参加者は十一名。

実際に野外に出て周辺の樹木を十分程度スケッチし、構図や視点のあて方、子どもたちに指導する際の留意点などが例をあげて説明され、円筒形の紙を絵の具一色で立体感や陰影を表す実技にも取り組みました。参加者からは「教師自身苦手なので、とても勉強になった」「ものの見方がよくわかった」「失敗すると消したがる子どもがいるが、その指導方法が示され、役に立った」などの感想が話されました。

「馬の絵写生会」

七月十九日　ライディングパーク

馬に触れる機会の少ない小・中学生のために実施しました。今回は江別市や帯広市など町外からの申し込みがあり、参加者は八名。乗馬を体験後、草を食べさせたりして、馬とじかに触れ合いました。実際の製作では、脇坂裕先生の指導を受けながら、熱心に取り組みました。なお、ほぼ全員が馬の絵作品展に応募しました。

アート・キッズ・クラブ

五月二十四日～二〇〇四年二月二十八日　鹿追町民ホール

学校週五日制に伴う土曜日活用として、今年度からほぼ月一回、通年で八回実施します。小学生対象に、ペットボトルや発泡トレイなどの身近な不用品を活用してさまざまな工作に取り組みます。具体的には、ジグソーパズル、風車、ランプシェード、指人形、クリスマスの飾り、昔のおもちゃ、ミニ絵本作りです。

初回は二十九名の参加で、発泡トレイに絵を描き、カッターナイフで切り取るジグソーパズル。二回目は、笹川小学校の笹の子クラブも合同参加し、総勢三十五名で、ペットボトルから風車を作りました。その後、画用紙とボール紙で電球の傘となるランプシェード、そして軍手や布、トイレットペーパーの芯を活用して楽しい指人形作りをしました。

夏休み子どもワークショップ「スティックトンボを作って飛ばそう!!」

八月六日　鹿追町民ホール

講師に大沼秀行氏を迎え、アイスキャンデーのスティックとペットボトルを活用して、現代風竹トンボともいえるスティックトンボ作りを行いました。参加者は十二名。

アイスキャンデーのスティックを講師の大沼氏がグラインダーで削って角度をつけてから、参加者が紙ヤスリをかけ、竹ひごを刺して模様を水性マジックで描きます。また、ペットボトルの円い曲面を利用してプロペラ状に切り取り、こちらも竹ひごに刺して、簡単なスティックトンボを作りました。

野外で、高く飛ばす工夫をしたり、二人で互いに飛ばし合ったりして、楽しく遊びました。

ファミリー美術館事業

親子写生会

五月十八日　神田日勝記念館前庭・鹿追町民ホール

親子五組、総勢十八名の参加で、講師に脇坂裕氏を迎え、行われました。当日は雨が降り、肌寒い中、熱心に記念館や周囲の風景をスケッチし、町民ホールの工作室で着彩しました。親子のふれあいを、美術を通して深めてもらおうという趣旨で始められた写生会も今回で三回目。子どもの作品を手伝ったり、子どもより熱心に取り組む親も見受けられ、完成作品は、ピュア・モルト・クラブ・ハウスに一週間展示されました。

親子ワークショップ「木のネンドでなにができるかな?!」

九月二十日　鹿追町民ホール

三才から五才の幼児と親を対象に行われたワークショップで、参加者は今までの最高の四十三名。

講師は造形作家の中島亜希子氏。おがくずでできた木のねんどを練って、鉛筆やストローで模様をつけ、動物や植物、置物や表札などを作りました。当日は母親ばかりではなく、父親の参加もあり、親子で一緒に楽しそうに取り組んでいました。

寄／稿／文

「神田兄弟と」

高野　薫

昭和二十六年八月、北海道も各学校共遅い夏休みに入っていた。農家の人たちは麦刈りに暑い日差しに汗を流している。

そんな風景の中を、三人の少年は二台の自転車に跨って、砂利道を一心に漕いでいた。

この少年の名は、神田一明、日勝兄弟と高野薫の三人である。一明と薫は中学の同級生であり、お互いに鹿追中学校へは他校生として入ったこともあり、通学路も同じ方向のため気心の知れた仲であった。

中学を卒業後、一明は帯広へ薫は地元の高校へと進んだ。その後何度か顔を合わせるうちに、ある冒険旅行を企てた。行き先はあまり遠くない所と言うことで、屈足の奥にある岩松発電所と決まった。しかし乗り物をどうするか。当時は自転車が一般的な乗り物であったが、各戸に余裕のある台数はなかった。

一明の家は二十年に、東京から越して来た集団疎開組であり、父親要一が就職した郵便局へ通勤時の唯一の乗り物であり貴重品であった。子供の遊びに使う訳にはいかない。

一方、薫の親達は大正末期から地元で、百姓をやっていた。子供が多く貧しい暮らしをしていたが、なぜか二台の自転車を持っていた。ヨシ！これを借りよう、と話しはまとまり、いよいよ決行となったわけである。

全行程砂利道。笹川十一線を出発し、鹿追市街を経由し、幌内の坂を押して上る。一明は、自転車の後ろに日勝を乗せて、懸命に漕いでいる。彼ら兄弟は体格が良かったので特に応えたようだ。

ときどき、コルク栓のついた軍用水筒から、喉をうるおす。やがて屈足市街を通り抜けてからの一本路の長いことに、三人は辟易していた。時計も無く、自分達の向かっている方角と太陽の向きで時刻を推定し、黙々と踏み続ける。やがて発電所に着く。ここを過ぎると登りが続き、ほとんど乗るところは無い。

どのくらいの時間と距離を費やしたか、確かなものは無いが、目の前にダムが見えてきた。三人の少年は小躍りして歓声を上げていた。ダム脇の階段を下り川原に降りて水浴びで汗を流す。

やがて楽しみの弁当を開いた。薫の弁当は普段よりは豪華だ。麦飯だが玉子焼きがついている。一明兄弟の弁当には目を見張った。白米ご飯で海苔巻きだ。これを見て薫は生唾を飲んだ。一明が無造作に「おい、たべろよ」と一言いってくれた彼の人柄に感激した思いは、今も薫の胸に焼きついている。

やがて帰路についた。発電所前の吊り橋を渡り、崖のような勾配の坂を、自転車を押し上げる。こうなったら二人がかりに敵わない。何とか新屈足から上幌内にたどりついた。

上幌内から瓜幕橋に下る道路で、事件が起きた。兄弟の乗っていた中古自転車が、朝からの激務に耐えられず、分解してしまった。ハンドル部分と、前輪とホーク、それらをのぞいた車体と三個の鉄屑となった。この鉄屑捨てることもできず、夏の陽もすでに落ちてショボショボと三キロあまりを歩いた三人の少年を見ていたのは、十五夜のようなお月様だけであった。

中学校を終わって、五十年余りが過ぎ去った。どんな運命の巡り合わせか、あの時の日勝とは義兄弟となったが、彼が逝ってすでに三十年になろうとしている。

あの時の三人で健在は、年嵩の二人になった。一明君も大願成就して、いまは自由人。

久しく故郷で会うことのなかった彼が、近々鹿追で個展をとの話を耳にした。その時は、近くの仲間を集めて、歓待出来る日を今から楽しみにしている。

個展の盛会を祈念しつつ。

高野　薫

昭和8年、鹿追町生まれ。鹿追高校卒。昭和28年、開拓農業協同組合に就職。昭和40年、鹿追農協勤務、平成4年、退職。現在、鹿追町社会教育委員。民生児童委員協議会々長。趣味はエッセイと俳句。

「二度生きる―神田日勝の世界」の発刊

北海道立近代美術館学芸副館長の鈴木正實氏による、ほぼ二十年ぶりの神田日勝に関する著作が刊行されました。前著「神田日勝北辺のリアリスト」は評伝であり、新著は評論として著者の実体験をふまえた内容になっています。

神田日勝の初期作品群を北海道遺産に

神田日勝記念館友の会は、日勝の「家」「ゴミ箱」「飯場の風景」「馬」など初期作品群を、第二次募集で北海道遺産に登録をめざす運動を開始しました。

「ゴミ箱」1961年

感想ノートより―⑯

2003.5.9.
僕は1970年生れで、1985年に読売新聞日曜版に「室内風景」が紹介されてるのを見て、自分の生年に死んだ画家と、新聞や生活用品などのリアリズムが混在した不思議な絵が常に気になってました。その後日曜美術館等で常に気にしてました。今後も気になる画家です。ポップな「壁と顔」とか無かったのが残念。32歳のうちに来れて良かった。
川崎市

2003.7.7
待ち続けた日勝の作品との出逢いくるんですばらしい人生だったの？ 向き合った馬の絵に魂しいが生きついて 私の胸をどんどん通りぬける とてもふれることも表現することも出来ない 只々涙だけが流れる。
誰れにもないすばらしい感性にふれて余生に於いてあなた様の生きる姿を心ふて過ごして参ります
本当にありがとうございました。仙台

2003
7/23(水)
奈良県より来ました。
農業をしながらも 夢を追い続ける 力強い 魅力の
つめられたような絵に引きつけられました。
力に感

8/23(土)
数年前に勤めていた会社仲間と訪れました
神田日勝さんの絵は小さい頃、母と二人で常にいて見た事があり、
幼いながらにもすごい魅力を感じたのを今でも覚えています。
何度見ても良いものはいいですね。
今日は子供達を連れて来ました この絵を見てどう思ったのでしょうか？
日勝さんの絵で生きる事のすごいパワーを感じずにはいられません… 数年後、家族でこの絵を見に来たいと思います…

今、生きていれば66才
まだ、まだたくさんの作品が
描けたであろうに…と思うと
残念です。
が、画家としては、完成して
いながら 早死したのでしょうか…
札幌市
Aug 26. 2003

開館十周年記念事業

「飯場の風景」の感想文を募集

「飯場の風景」（一九六三年）は、粗末なストーブの周りで休息をとる二人の男を、全体に茶褐色の色調で描かれています。八歳のときに東京から戦時疎開で鹿追に移住した日勝が、北海道の風土に根ざし、そこに生きる人々に深い共感を持って描いた作品の中でも傑作と言われています。この作品から受けたイメージを感想文に書いてもらうことで、新たな日勝像が生まれたり、北海道の開拓の歴史への追憶や思い出が語られることでしょう。

「飯場の風景」1963年